

令和4年6月4日

佐藤 猛 夫

清水次郎長と明治維新

1. 東海道江尻宿と清水港

「駿河路や 花たちばなも 茶の匂い」(芭蕉)

駿河路は、東海道では三島と沼津の間の境川から、西が大井川まで。江尻は東海道五十三次では品川から数えて18番目の宿で、府中の一つ手前にあたる。

江尻が宿場町(戦国時代には一時甲州武田氏の出城としての江尻城があった)であったのに対し、清水は舟運の中継場所としての港町で、町の性格は大きく異なっていた。

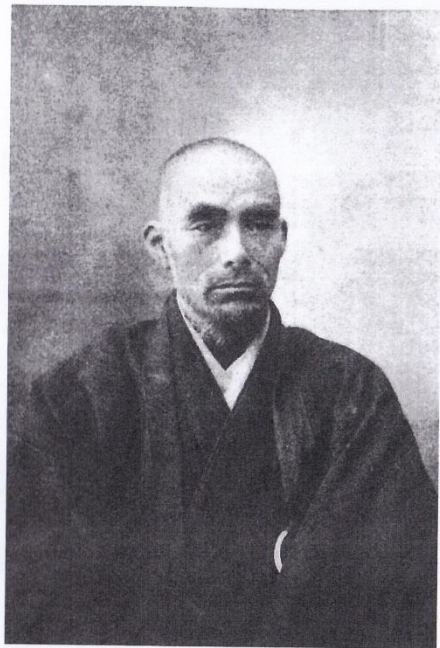
この二つの町は、西の府中方面から駿河湾に注ぐ川幅30間(55m)~90間(160m)ほどの巴川とその南の水田地帯をはさんで、約1.5~2km程離れていた。

清水はこの巴川の河口右岸に出来た港町で、今川氏が駿河の守護大名の時代既に駿府の外港として重視され、巴川を遡って駿府城下へ至る物資の舟運が行われていた。

江戸時代には、天領甲府方面の年貢米を江戸へ送るため、幕府は慶長12年(1607)と同19年(1614)の二度に亘り京都の豪商角倉了以・素庵父子に命じて富士川の開鑿を行い、甲州鰍沢・黒沢・青柳の河岸から富士川河口の岩淵までの舟運を開通させた。

これにより甲州米は富士川を下って一旦岩淵で陸揚げし、次の宿蒲原まで約半里を陸上輸送し、蒲原から舟で清水港へ回送、清水港から外洋航行可能な船に積替えて江戸蔵前へ海上輸送されることになった。また、逆に清水港を経由して瀬戸内、三河方面からの塩をはじめ海産物、陶器、藍玉、干鰯等の物資が岩淵河岸から甲州へ送られた。

幕府はこれら物資を取扱う回船問屋42軒に取扱い独占の特権を与え、流通を担わせた。



天田五郎(愚庵)



清水次郎長

- ・天保 14 年（1843）の東海道宿村大概帳によれば、江尻の宿内総家数 1,340 軒、人数 6,498 人。文久元年（1861）の清水町の総戸数は 697 戸（清水市史より）となっており、幕末頃の清水町の規模は江尻町の略 1/2 程度であったと思われる。
- ・当時の清水町は北から南へ向かって上一丁目、上二丁目、本町、袋町、新魚町、本魚町、中町、美濃輪町の 8 ヶ町内から成っていた。北 3 町は回船問屋の街、中 3 町は漁業関係者、南 2 町は新開地で生活関連商い、荷揚人足その他の居住地域であった。
- ・年貢米の回送は明治維新を境に廃止されたが、富士川舟運は諸物資輸送のため明治 36 年（1893）の中央線東京一甲府間開通、昭和 3 年（1928）の身延線全通まで続いた。

2. 天田五郎著『東海遊俠伝 〈一名次郎長物語〉』

（1）天田五郎と鉄舟、次郎長の出会い

「次郎長ハ実名山本長五郎、静岡県駿河国有渡郡清水港ノ人ナリ、父ヲ三右衛門ト云ヒ、航海ヲ以テ業トナス」

『東海遊俠伝』の冒頭の文言です。

- ・次郎長の生い立ちについては次のように書いている。

「長五ハ即チ其ノ第三子ナリ、文政三年（1820）正月元日ヲ以テ生ル、親姻相義シテ曰ク『古ヨリ元日ヲ以テ生ルハ者若シ賢オナラザレバ、即チ極悪ノ人タリト聞ク、既ニ二兄アリ、出シテ人ニ与ルニ如カズ』ト、三右ノ妻ノ弟ヲ次郎八ト云ウ、米賈ナリ、曰ク『我レ子ナシ、幸ニ此兒ヲ得テ以テ継嗣ト為シ』ト、遂ニ其養子トナス」（なお、次郎長の生年月日について、戸籍簿には文政 3 年 12 月 10 日と記載されている）

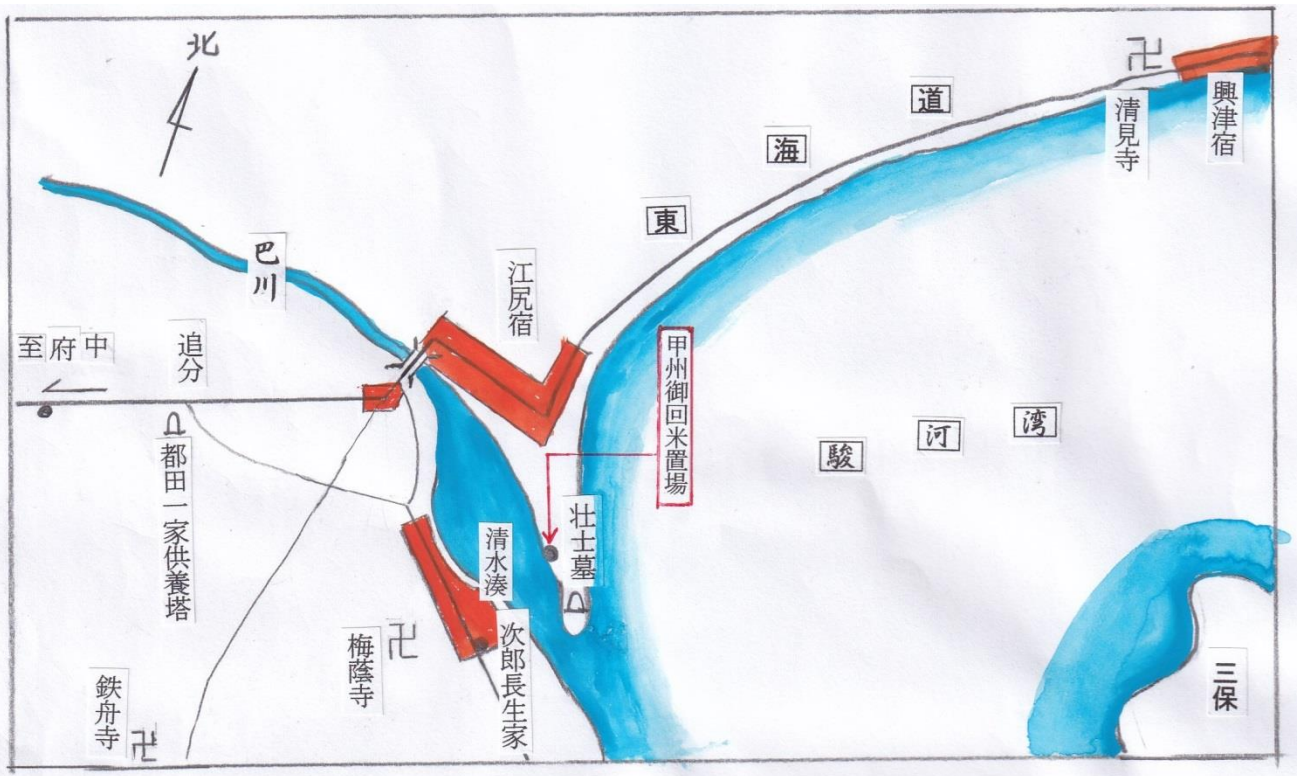
- ・父親の三右衛門については

「稟性敢果、船ヲ出スニ風雨ヲ問ハズ、人呼デ雲不見三右衛門ト云フ」と記している。

天田五郎（幼名：久五郎）は嘉永 7 年（1854）陸奥国磐城平藩（藩主安藤信正）の藩士甘田平太夫の五男として生まれた。平藩は慶応 4 年（1868）戊辰戦争で奥羽越列藩同盟に加わり、15 才の五郎は藩士として出陣した。平城は 7 月 13 日落城し、五郎は仙台へ逃れた。

戦乱が終わり郷里へ戻った五郎は、父母と 5 才下の妹が落城の 4 日後に行方知れずとなったことを知った。

以来、五郎は父母、妹の消息に八方手を尽くして探索を始めることとなった。明治 4 年（1871）上京して神田駿河台のニコライ神学校に入学したが、教義を受容できず 1 年足らずで退学し、新政府官吏（正院大主記）小池詳敬の書生となった。この頃小池の紹介で、明治天皇の侍従になっていた山岡鉄舟（1836～1888）の知遇を得た。明治 6 年（1873）には国学者落合直亮（1827～1894）の仙台赴任に随行した。明治 7 年（1874）台湾征討に従軍し、帰路鹿児島で数カ月の間桐野利秋のもとに身をよせた。帰京の後故郷磐城平に戻ったが明治 9 年（1876）には函館に渡り、翌年春再び東京に戻った。この時鹿児島では西南戦争が勃発しており、鉄舟は五郎が鹿児島へ発つのではないかと心配し、軽挙妄動を戒めるべく半ば監視付で五郎の生活の面倒を見たという。



明治 11 年（1878）五郎は鉄舟に無断で大阪へ行き、板垣退助らの愛国社運動に参加したが、鉄舟は五郎の行動を危惧し、「急ぎ東京へ立ち帰るべし」と人を使い封書をもって促した。鉄舟は明治天皇の北陸東海巡幸に供奉しており、11 月 3 日静岡泊となったところで五郎は大阪から追いつき鉄舟と会うことができた。鉄舟は次郎長を宿所へ呼んで五郎を引き合わせ、この若者を暫く次郎長の手元で預かって貰いたいと依頼した。

この時の鉄舟と次郎長の会話を五郎は自伝「血寫経」で次の如く記している。

「親方ヨ我今マ汝ニ預クベキ物コソアレ、此ノ眉毛太キ痴者ヲハ暫ラク手元ニ預カリ呉レヨ、尻焼猿ノ事ナレバ、山ニ置クモヨカルベシ」ト云へバ、次郎長ハ去ル者其意ヲ察シ、

「畏マツテ候、某シ屹度預カル上ハ御氣遣アルナ、併シ餘リニ狂ヒ候ハバ其時胴切ニ斬リハナシ候ホトノ事ハ御許シアレカシ」ナドト戯レテ（以下略）。

かくして五郎は云わば次郎長の食客となり、今まで自分の生きてきた世界とは全く異質の世界があることを知り、海道一の親分と云われる侠客の半生を書き綴ろうと思い立った。

五郎からの申し出に次郎長は初め戸惑いを見せたが、早や還暦を迎えようとする今までの人生を振り返りつつ語り出したという。五郎は次郎長とその子分から連日聞き書きを続け、翌年春五万字余りの次郎長物語の原稿が出来上がった。

原稿の最後は次の言葉で締めくくった。

「明治十二年、歳六十、氣力壯者ニ減ゼズ、自ラ耒耜（ライシ）ヲ執テ、日ニ耕種ニ励精スト云フ」

早速五郎は原稿を持って上京し、鉄舟にこれを預けた。

今なお五郎の父母、妹の行方を求める情は已み難く、この後福島に住む長兄真武に会い、7 月には兄弟連名で複数の新聞に探索の広告を出している。また秋には浅草の写真師江崎礼二に入門し写真技術を習得、明治 13 年旅回りの写真師となった。両親の消息を求めて熱海、伊豆半島を巡った後東海道を西へ向かい、京都からは東山道を回ったが、手掛かりはつかめず空しく帰京した。

明治 14 年（1881）2 月、『東海遊俠伝』執筆で世話になった次郎長の一の子分、大政の訃報を聞き五郎は清水へ帰ってきた。この時五郎は子供のいない次郎長から強く請われ、次郎長の養子となった。それから 3 年間次郎長の一大事業である富士山麓開墾事業の現地監督を勤めたが、開墾事業は挫折し、山を下りた。

この時期五郎には、鉄舟の紹介で有栖川宮家への就職の話が進みつつあった。有栖川宮家の下総の開墾地の仕事である。が、宮家に「博徒の子」が就職するわけにもいかず、五郎は鉄舟、次郎長、おてふ（三代目）の許しを得て明治 17 年（1884）11 月養子を解消離籍し、清水を去った。明治 19 年（1886）有栖川宮家を辞し内外新報社（大阪）へ入社したが、肉親の行方を求めて 20 年八方手を尽くしても消息つかめず、この上は心の内にそれを求めるようにとの鉄舟のすすめで翌年京都天龍寺滴水禅師の許で参禅、得度し鉄眼と称した。明治 25 年（1892）春、京都清水産寧坂の近くに草庵を結んだ。愚庵と名付け、自身も愚庵と号した。

明治 37 年（1904）1 月死去、享年 51 歳。

(2) 『東海遊俠伝 〈一名次郎長物語〉』の発刊

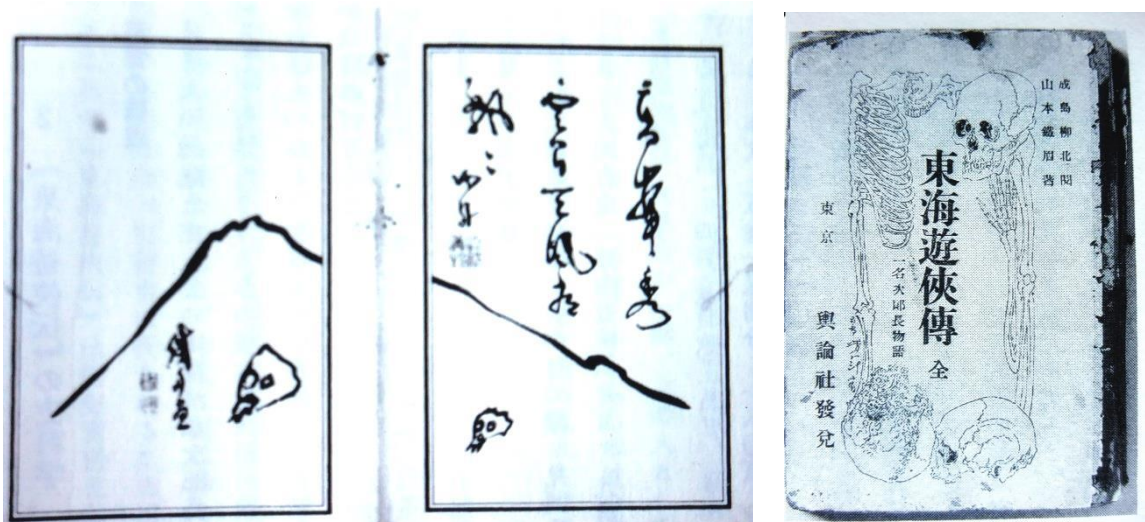
明治12年(1879)春鉄舟が預かった原稿は、鉄舟周囲の人の求めに応じて回読され、面白いという評判を得、五郎はその紛失を恐れたほどだったという。

明治17年(1884)2月次郎長が「賭博犯処分規則」により逮捕投獄されたことから、次郎長後半生の社会的貢献を広く世間に認めてもらい処罰軽減を求めようと、次郎長物語が急遽発刊の運びとなった。

書名を『東海遊俠伝』とし、副題に〈一名次郎長物語〉を付し、表紙には成島柳北、山本鐵眉著とある。

成島柳北は「朝野新聞」を創刊し初代社長を務めた言論新聞界の重鎮であり、鉄舟の依頼により校閲を引受けたと思われる。山本鐵眉とは養子先の姓山本に鐵眉と号を付したものである。序文は五郎の畏友大岡育造(この当時弁護士、後に衆議院議員、衆議院議長を歴任)に依頼した。表紙見開きには鉄舟が得意とする富士山と二つの髑髏の墨絵と、これに勝海舟が「高峯秀雲間 天風為飄々」と讚を入れている。

かくして五郎をとりまく錚々たる人達の協力のもと、同年4月東京神田淡路町の輿論社から出版された。



3. 次郎長と明治維新

(1) 咸臨丸事件

慶応4年(1868)3月5日東征軍大総督有栖川宮が駿府に到着。3月22日駿府町は幕府直轄の町奉行に代り総督府より遠州浜松藩家老伏谷如水が駿府町差配役に任命され、伏谷は更に4月26日には駿遠三裁判所判事兼務を命ぜられ、当地方の司法、行政を一手に統括することになった。5月29日伏谷は次郎長を駿府へ呼んだ。その時の伏谷と次郎長のやりとりを天田五郎は次のように書いている。

「方今軍国漸ク多事、名ヲ士人ニ藉リ、或ハ官吏ニ擬シ、所在不良ヲ為ス者アリ、且ツ夫レ幕士ノ府中ニ在ル者、其論一ナラズ、動モスレバ方向ヲ誤リ、以テ上司ニ抗ス、実ニ憂フベシト為ス、如今汝ヲ挙ゲ、道路ノ事ヲ探察セシム、故態ヲ竣メテ以テ奉公ニ勉メヨ」

「微賤無頼、如何ゾ之ニ任ヘン、冀クバ更ニ他人ヲ撰ベ」

次郎長は固辞したが伏谷の説得により、東海道筋、清水港の警固を引き受けることとなった。伏谷は見返りに

「積年ノ罪過ヲ免除シ、之ニ加ルニ平民得ベカラザルノ帯刀ヲユルシ・・・」

次郎長は天保13年（1842）に清水を出奔、無宿となって以来26年の後、晴れて治安警察の公務に携わることとなった。

同年5月24日徳川家は駿府に移封が決まり、7月2日伏谷は浜松へ戻るべく駿府を発ったが、次郎長はその道中警護の役をつとめた。

同年9月18日、台風による船体損傷で清水港に緊急避難していた幕府軍艦咸臨丸が新政府軍軍艦に砲撃され、十数人が斬殺される事件が発生した。咸臨丸は翌日新政府軍の富士山丸に曳航されて東京へ向かったが、海中に投棄された犠牲者の遺体は港内に放置されたまま腐乱、腐臭を発しており、これを見かねた次郎長は夜間子分を使って遺体7体を収容し、巴川河口左岸の向島に埋葬した。

次郎長が独断で賊軍の遺体を埋葬したことは官軍、駿府藩の双方から「余計なことをしてくれた」と非難された。この時次郎長は次の如き啖呵を切ったと『東海遊侠伝』には書かれている。

「是非ハ即チ我レ知ラズ、然カモ此輩皆命ヲ国家ニ致ス者ナリ、如何ゾ之ヲ魚服ニ餒セン」

「人ノ世ニ処ル、賊トナリ敵トナル、悪ム所唯其生前ノ事ノミ、若シ其レータビ死セバ、復タ何ゾ罪スルニ足ランヤ、今官軍戦勝テ余威アリ、而シテ特ニ敵屍ヲ投棄シテ去ル、我其不仁ヲ憾ム、腐屍港口ニアル者数日、漁者為ニ業ヲ廃ス、我レ其不幸ヲ憫ム、不仁ノ為メニ仁ヲ為シ、不利ノ為メニ利ヲ計ル、何為レゾ嫌疑ヲ避ケン」と。

この咸臨丸事件をきっかけとして、次郎長は山岡鉄舟と懇意になったといわれ、翌年一周忌を前に建立した墓石の碑銘『壮士墓』は鉄舟の揮毫によるものであった。

同年12月、清水港と湾を隔てた対岸三保村の三保神社神主が賊により斬殺、家財掠奪され、その翌月には三保で数十戸が焼失する大火が発生し、民心の動揺と被災者の困窮から暴動に発展しかねなかった。次郎長はこれの鎮静化を図るべく罹災者への救援活動を進め、事態の収拾に一役買った。

慶応4年（1868）から翌年にかけての駿府は旧幕側と新政府側双方の人間が入り混じり、相当の混乱を呈していたことがうかがわれる。即ち、

- ① 7月23日徳川慶喜が水戸から海路清水港へ着き、駿府の宝台院へ入り蟄居。慶喜を護衛してきた精鋭隊（駿府へ移り新番組に改め）が久能村に居住した。（後に牧ノ原に入植し大茶園を創出した。）
- ② 8月15日徳川宗家16代家達が駿府へ入城。これに従う幕臣が家族と共に次々に駿府へ押し来たり、駿府藩はこれらへの宿泊、食事、移住先の斡旋に追われた。
- ③ 9月18日咸臨丸事件の発生
- ④ 駿州赤心隊（尊皇倒幕の国学思想のもとに駿河の有力神官で結成され、東征軍の東上にも従軍した。）と新番組の対立。
 - ・・・三保神社神主の殺害は新番組隊士によるものであった。また、翌明治2年5月次郎長の留守中に女房おてふ（二代目）が自宅で暴漢に殺害されたが、その犯人も新番組隊士であった。

(2) 富士山麓開墾事業

明治7年(1874)1月静岡県権令(後に県令)に元薩摩藩士大迫貞清(1825~1896)が就任、大迫は次郎長に富士山南麓(富士郡大淵村)の開墾事業を提案した。76町歩に及ぶ原野を子分や静岡監獄の囚人を使い、一時は天田五郎を現地の監督にして開墾を進めたが、資金枯渇と労働の質の問題から事業は捗らず、明治17年(1884)関係者は山を下り事業は挫折した。開墾用地は明治21年(1888)未開拓分も含め次郎長に払下げられ、うち40町歩は横浜の実業家高島嘉右衛門に売却された。

次郎長一家による富士山麓開墾事業は失敗に終わったが、その後地元民のほか御殿場、裾野方面や山梨県からも入植者があり、再び開墾が始められた。現在開墾地は「次郎長町」と呼ばれ、中心地区には白髭神社が祀られ、傍らには明治39年建立の「大俠次郎長開墾記念碑」(海軍大将八代六郎揮毫)が立っている。

開墾事業の一方、次郎長は清水港から横浜経由で欧米へ茶の輸出が盛んになるのを見て、回船問屋衆に蒸気船会社の設立を説いて回った。明治9年(1876)地元や横浜の有力回船問屋の出資により開運業「静隆社」が設立され、会社が購入した三隻の蒸気船が清水から横浜港へ静岡茶を輸送した。

また同じ頃、次郎長は横浜から英国人講師を招いて清水に英語塾を開いた。

(3) 静岡監獄収監・仮釈放

明治16年(1883)12月大迫県令が警視庁警視総監に転出し、後任には大迫と同じく元薩摩藩士の農商務省権大書記官奈良原繁(1834~1918)が着任した。この時期全国的に自由民権の運動が高まっており、博徒がこれと結託することの恐れと旧幕臣の多い静岡を注視していたことから辣腕の奈良原を静岡県令に充てたとも言われている。

奈良原が着任した翌月の明治17年(1884)1月、「賭博犯処分規則」が公布され、博徒大刈込と世間に言われた一斉逮捕が全国各地で始まった。

2月25日早朝、次郎長は自宅で逮捕され静岡井宮監獄へ収監された。女房おてふは旧清水8ヶ町の有力回船問屋、商人を回って次郎長釈放の嘆願を働きかけ、県警本署へ嘆願書を提出するとともに県庁へも出頭し釈放を強く訴えた。4月7日懲罰7年過料400円の処罰が言い渡された。一方で天田五郎は鉄舟や前県令大迫らへ釈放を要請するとともに、5年前に書き上げて鉄舟に預けておいた「東海遊侠伝」を出版することで世間へ次郎長の功績を知らしめ且つ過料金の調達することを目論んだ。

奈良原は同年9月在静わずか9ヶ月で工部大書記官へ栄転、後任に旧幕臣関口隆吉が元老院議員から着任した。関口県令(呼称変更で明治19年7月からは県知事)は慶喜の静岡蟄居の警護役を務め、牧ノ原茶園開墾では現地に居住し開拓の指揮にあたる等静岡の事情に詳しく、また鉄舟とは幕臣時代から旧知の間柄であった。これら次郎長をとりまく多くの人達の尽力で、明治18年(1885)11月次郎長は1年9ヶ月ぶりに仮釈放、出所となった。

・次郎長が静岡井宮監獄から出所した翌年、東京一関西を結ぶ鉄道を中山道経由から東海道経由に変更することが決定され、鉄道局長となっていた奈良原が清水へ来て次郎長と面談した。奈良原は次郎長を収監したことを詫びつつ、東海道線敷設工事請負の元締め役を持ちかけたが、次郎長は「他人に汗水流させて自分だ

けが楽に儲けるなんぞは大嫌いだ」と即座にこれを断ったという。

(4) 晩年の次郎長

①鉄舟寺再興に尽力

山岡鉄舟は有度山東麓にある久能寺が廃仏毀釈で無住職のまま荒廃がひどいことを憂い、明治16年私費で旧跡を買い、仮本堂を建てて久能寺の再興を発願、寺号を補陀洛山鉄舟寺に改名した。復興資金を広く募ることとし、次郎長に協力を求めた。鉄舟は明治21年に死去したが鉄舟寺の再興は緒についたばかりであり、次郎長は地元有力者の支援を得て復興に尽力、次郎長亡き後も志は地元の有力者達に引継がれ、明治33年(1910)3月に堂宇完成し入仏の大法要が執り行われた。

・この寺はもと有度山の一角をなす久能山上に在ったが、久能山が天正13年(1575)甲州武田軍の出城となった際、現在の地に移したものである。

②咸臨丸殉難者碑の建立

清水港で起きた咸臨丸事件から20年後の明治20年(1887)4月清水港を見下ろす興津の清見寺に咸臨丸殉難者の慰霊碑が建立され、その式典が挙行された。次郎長は式典終了後向島の壮士墓と梅蔭寺で供養の法要を営んだ。慰霊碑の背面には当時逓信大臣であった榎本武揚揮毫になる『食人之食者死人之事 従二位榎本武揚書』(人の食を食む者は人の事に死す)が大きく刻まれている。

・明治23年(1890)清見寺を訪れた福沢諭吉はこれを見て、翌年「瘦我慢の説」を著わし武揚を痛烈に批判した。

③割烹「末広」を開業

仮釈放となったちょうど1年後の明治19年(1886)11月次郎長は清水波止場の隣地に割烹「末広」を開業した。店はおてふが取り仕切ったと思われるが、開業記念の引出物として次郎長は鉄舟に手書きの扇子を千八本書いて欲しいと頼み、鉄舟はこれを快諾したという。

晩年の次郎長は好々爺で、町の子供達が遊んでいると着物の袂から飴玉を取り出して子供等に分け与えたりしていた。

明治26年(1893)6月12日次郎長は「末広」の一室で74歳の生涯を閉じた。6月15日梅蔭寺で葬儀が行われた。戒名は碩量軒雄山義海居士。

・翌年6月の一周忌に建立された梅蔭寺の墓石の正面には『侠客次郎長之墓 武揚』とだけ刻まれている。

(終)

(主要参考図書)

- | | | | |
|--------------------------|--------|-------|--|
| ・「愚庵全集」 | 政教社出版部 | | |
| ・「清水次郎長と幕末維新—『東海遊俠伝』の世界」 | 高橋 敏 | 岩波書店 | |
| ・「清水次郎長—幕末維新と博徒の世界—」 | 高橋 敏 | 岩波新書 | |
| ・「梅蔭寺 清水次郎長伝」 | 田口英爾 | 梅蔭禅寺 | |
| ・「次郎長の風景」 | 深澤 涉 | 静岡新聞社 | |
| ・「実録荒神山」 | 味岡源吾 | アジオカ | |

以 上